2006 Winter

明治村だより

冬号 Vol. 46

目次

博物館明治村の近代和風建築総説 西尾雅敏 …2

新展示資料紹介 神島灯台レンズと回転機械 …4

冬の明治村—催しものご案内……5

A La Meiji-mura ……6

明治村 案内図

平成18年12月10日発行

「明治村だより」第46号（平成18年 冬）

発 行 博物館明治村
〒484-0000 愛知県犬山市内山一番地
電話（0568）67-0314
◎ホームページ http://www.meijimura.com

製 作 大日本印刷株式会社

『明治村 だより』 第47号発行のお知らせ
発行時期 平成19年3月（予定）
申込方法 「明治村だより」第47号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料140円の切手とともに封書にてお申し込み下さい。

表紙 御巡幸御行粧之図（部分） 明治18年 長谷川貞信（二代）

博物館明治村の近代和風建築総説

西尾 雅敏

はじめに

博物館明治村には近代和風建築に挙げられる建物が十三棟あります。国指定の重要文化財になっている東松家住宅と呉服座。他に、十一棟あります。

近代和風建築とは、明治以降に建てられた和風の建物を言いますが、江戸以前に建てられた和風建物と比較した場合、市民階級における富の蓄積、大工技術や大工工具の進歩などにより、優れた建物が多くなったと言えます。

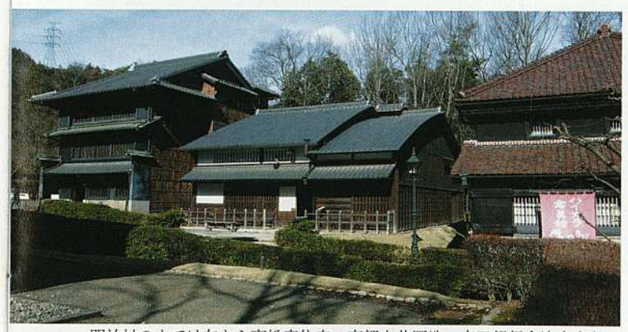
ご承知のように博物館明治村に建っている建物は全てが移築であって、通常、近代和風建築を通覧する時に課題となる「地域の中での共通の特徴」などを探し、論ずることは在り得ません。では、博物館明治村の中に移築されている建物群から何を見出すことができるか。その手掛かりは移築復原されたという事実にあります。移築に当たって、出来得る限り創建の姿に戻されている。即ち、博物館明治村の中で目の当たりにする建物は、原則として創建当初に戻った姿です。

住いであれ、商家であれ、官公庁の建物であっても、長年月使い続けられれば、時の流れとともに、不便さが生れることがあり、劣化もあって、増改築されることが多い。博物館明治村へ移築されたほぼ全ての建物に、そのような改変の履歴がありました。博物館は、その役目として、所蔵物品をその本来の姿に戻して収蔵展示します。知りうる限りにおいて。よって、明治村に復原された建物の姿は、その創建当初に戻った姿です。

十三棟の建物は、創建された地域が異なると同様に、建てられた時期も違います。この各々の経歴の違いこそが、明治村に集まることによって生じた大きな意義の一つです。明治初年から昭和の始めまで、約六十年余の期間に作られた十三棟の建物は、それぞれ創建の姿で並んでいる。比較して見ることにより、地域の違いと重ねて、時代変化を見ることが出来るのです。

比較事例

京都中井酒造と名古屋の街中にあった東松家住宅とは、明治村では隣接して建っています。明治三年に京都御所から一キロほど、河原町通りに近い筋に創建された中井酒造。明治中期になって名古屋堀川近くに建てられた油問屋の東松家住宅。いずれも、繁華な街中の建物で、通り土間を持つ商家ですが、軒の高さにおいて雲泥の差が見られます。三階建てで、城を思わせるような大屋根を頂く東松家住宅。方や、虫籠窓（むしこまど）の上に緩いむくり屋根を載せた、低く穏やかな中井酒造。京都と名古屋を必ずしも同列に比較することは無理かも知れませんが、明治期名古屋では街が急速に発展し、建物の収容能力を増すために、高く、大きくなってきた変化をみることができます。また、京都での造り方、名古屋地方の建て方、その違いを見ることもできます。端的な違いは、内部の畳の大きさです。東松家住宅はいわゆる関東間、中井酒造は京間です。しかし、中へ入っただけで瞬時には、その違いに気付かない。座敷周りの造作が、それぞれに釣合い良くまとめられているため、畳の大きさに違和感を覚えないのです。時代と地域を異にする建物が並ぶ姿は、他にもあります。本郷喜之床、小泉八雲避暑の家、呉服座、半田東湯、以上四棟の近代和風建築が軒を連ねています。



明治村の中では左から東松家住宅、京都中井酒造、安田銀行会津支店と軒を連ねる

創建年代は順に、明治末年、明治初年、明治中期、明治末年。元の場所は、東京本郷、静岡県焼津、大阪池田、愛知県半田。芝居小屋にも二階席があることを考慮に入れれば、全てが二階建ての建物群ですが、軒高に面白い程の違いがあります。或いは、正面の壁の建ち方にも違いがあって、時代が下るに従い、二階の壁が前に出てきています。都会の建物、漁港の店と銭湯、少し田舎の芝居小屋、地域と用途の違いで建物を比較しても意義があるでしょう。

元々街中ではなく、余裕の

ある庭に建っていた建物を比較してみると、趣味の変遷、住み方の発展を知ることができます。

左奥から本郷喜之床、小泉八雲避暑の家、呉服座、半田東湯

文豪幸田露伴が借家した東京向島の「蝸牛庵」と、最後の元老と呼ばれた西園寺公望が清水港を望む海岸に建てた「坐漁荘」は、向かい合って復原されています。床面積という規模において凡そ二・五倍の開きがあり、また、蝸牛庵は明治初年創建、坐漁荘は大正から昭和に掛けて建てられたという大きな時代の差があるにも関わらず、二つの建物の風格はほぼ同格です。蝸牛庵は江戸末期の豪商の別宅であり、坐漁荘は懐古趣味をほぼ完全に消して近代化された和風建築の粋です。時代と地域を異にしながら、互いに譲らぬ風格の基は、どちらも数奇屋としての姿が大変に美しいことに尽きるでしょう。

だが、詳細に見ると、借家された理由、造られた目標の違いが判ります。蝸牛庵では、執筆の場として使われた座敷が秀逸で、筆を置いて眺める土庇からの穏やかな眺めは無類です。露伴の趣味であった写真現像暗室を備えた奇特な家でもあります。向かいの坐漁荘は、引退したはずの公望を多くの政治家が訪問し、駿河湾を眺めながら西園寺公のご託宣を伺った歴史的な舞台です。内密の話が行われる場所は、意外にも開けっぴろげなサンルームであったようです。西園寺公は若き日フランスに遊学。彼の地の生活様式の過ごしやすさを晩年になって再び用いた結果でもありました。

坐漁荘の裏手の庭に、茶室が一棟あります。京都から移された「亦楽庵（えきらくあん）」です。坐漁荘と同様、近代化された和風を具現した茶室です。従来、閉鎖的であった小間の茶室を、開放的で明るい部屋に作りました。新時代明治の気構えが感じられます。

手前左、幸田露伴住宅「蝸牛庵」、右奥、西園寺公望別邸「坐漁荘」の門と塀（建物はさらに右方）

建物と住み手

博物館明治村に移築された近代和風建築の由緒を辿ると、明治時代に活躍した人々との縁が深い。先に挙げた幸田露伴の蝸牛庵、小泉八雲が避暑に訪れた家、森鷗外と夏目漱石が借りて住んだ家、坐漁荘は西園寺公の隠居所で、学習院長官舎も創建は乃木希典によっています。これほどに多くの著名人の家が和風であったことは、未だ、人々の感情としては西洋館生活に馴染めなかったことを裏付けるのかも知れませんが、他方、集められた建物を見ると、一軒一軒、どれもその建築としての価値が高い。八雲が夏に逗留した家は漁村の小さなお店であったが、律儀な造りの清楚な家で、森鷗外が住み、漱石が「吾が輩は猫である」を書いた家は、東京生活の近代化を如実に表しています。来客をどこに通すか、女中が個人的な時間を過ごす場所をどのように確保するか、古典的な間取りを改良して解決に導き、そこにプライバシーの萌芽を見ることができます。坐漁荘に到っては、西園寺公望の長く多彩な経歴によって培われた様々な知見と趣味が建物のあちらこちらに生かされ、住むこと、客を迎えること、憩うことなど、現代の住宅建築家が苦心惨憺する目標の多くを実現させているのです。サンルームの窓には、巻揚げ式の大きな日除けを取り付けるという、遊びとも思える仕掛けを設けて、居住性を高めています。

このように、建物とその建物に住んだ著名人を結びつけて通覧すると、著名人の目の高さに気付かされます。文学者であれ、政治家であれ、一流の仕事をした人は、確かな目を持ち、自らの生活の城である家を、慎重に選び、丁寧に作り、しかも大胆に改革したと言えます。そのため、私たちは、これらの建物をただ著名人縁りの場所として物珍しく見るのではなく、その人の生活風景を想像しつつ丁寧に見るならば、学ぶべきところが多いことに気付くでしょう。

結び

京都、三十三間堂に居並ぶ千一体の仏像は、そのお顔が全て異なり、どなたが訪ねてみても、どれかお一つの仏像のお顔に似ているといいます。明治村に集められている近代和風建築十三棟は、作られた時代が違い、地域も異なって、創建の経緯も様々です。異なる成立過程を経て生み出された、大きさも姿も用途も様々な幾多の建物を前にした時、見る人毎に好きな建物が異なることでしょうし、どれか一つは好きな建物が見つかるものと思います。

浪漫チック 明治村

12月16日～2月28日
（休館日は下記のカレンダーをご覧下さい。）

HOT
ホッとギャラリー

東山梨郡役所2階ギャラリー
近岡善次郎氏の水彩画「明治の西洋館」をお楽しみください。

旧開智学校校舎

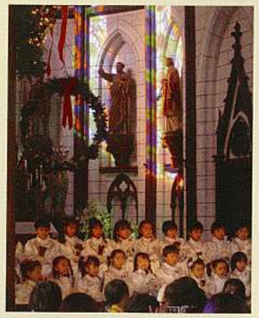
クリスマスの明治村

クリスマスデコレーション
～12/25（月）
村内の教会堂や洋館などにクリスマスの装飾を施します。

クリスマスミサ〈聖ザビエル天主堂〉
12/23（祝）11：00～

教会クリスマスコンサート
〈聖ザビエル天主堂〉
12/23（祝）13：30～、14：30～
ソプラノ・フルート・ピアノの女性トリオによるコンサート。

ハンドベルコンサート〈聖ザビエル天主堂〉
12/24（日）13：00～、14：00～
金城学院中学校ハンドベルクワイアによる演奏をお楽しみください。



クリスマス演奏会
〈聖ザビエル天主堂〉
12/25（月）
13：00～、14：00～

初春の明治村

正月飾り
〈第八高等学校正門・東松家住宅・京都中井酒造ほか〉
1/1（祝）～1/31（水）
日本家屋を中心に、建物のふるさとのお正月飾りを施します。

新春鏡割り〈呉服座前〉1/1（祝）12：00～
（提供：東洋自慢酒造株式会社）

祝餅つき〈呉服座前〉1/2（火）12：00～・14：00～

祝太鼓〈呉服座前〉
1/3（水）12：00～・14：00～

日本のあそび体験
〈京都七條巡査派出所横〉
1/1（祝）～1/3（水）
竹馬や羽根つきなどお正月の風情をお楽しみください。

新春演奏会〈呉服座前〉
1/7（日）13：00～・14：00～

祝成人！「成人の日」無料
1/6（土）～1/8（祝）
（年齢の証明できるものをお持ち下さい）

お知らせ

▶ 12月から2月の開村時間と休村日のご案内

開村時間
9:30～16:00

毎週土曜日は、小・中学生の入村料が無料になります。

下記カレンダーの■が休村日です

12月 2006年

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24/31	25	26	27	28	29	30

1月 2007年

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

2月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28			

新展示資料紹介

神島灯台レンズと回転機械

本年三月に、第四管区海上保安本部交通部と社団法人燈光会のご協力により神島灯台レンズと回転機械が博物館明治村三丁目にある管島燈台附属官舎内に設置され、展示公開されました。

神島は三島由紀夫の小説「潮騒」の舞台となった伊勢湾口に浮かぶ周囲約四キロの小島です。明治四十一年に神島の東側（伊良湖水道）で軍艦「朝日」が岩礁に接触するという事故が起きたのをきっかけに灯台の設置が建議され、翌年灯台の建設工事に着工、明治四十三年三月に竣工、五月一日初点灯されました。灯台は高さ十メートル程ですが、海面から灯火までの高さは百十メートル余りと、断崖絶壁に立地しています。

当時、灯台の光源の主流は石油ランプでしたが、この神島灯台は当初から自家発電施設が配備され、日本で初めて白熱電灯により点灯されました。

神島灯台には四等の閃光レンズが設置されています。このレンズは回転し、三十秒ごとに三回光が閃くものです。回転の動力は当初は灯塔内を降下する分銅の重力を利用したもので、分銅の巻揚げは人力によるものでしたが、昭和二十六年になって巻揚げ機械が電化され、昭和二十八年からは分銅を用いず、モーターで直接回転台を回転させる方法に変更され、昨年末まで使用されてきたものです。（図1）

水銀槽式回転機械は一八九三年にフランスで考案されたもので、明治三十年日本に輸入され、翌年、それを手本に国産品が製造されるようになりました。回転機械の上部にレンズを設置するためのレンズ台、その下に内槽と外槽があり、図2のように内槽と外槽の間に水銀を入れ、その浮力により灯器台を浮かせています。

ここではレンズが回転する様子がわかるよう動態展示されており、部屋の三方に神島灯台からみることができる雄大な海上のパノラマ風景が繰り広げられ、展示室へ足を一歩踏み入れると、センサーを感知したモーターが自動的に動き出します。

水銀槽式回転機械は航路標識現場ではほとんど使用されなくなってきているものです。是非この機会にご覧いただけると幸いです。

神島灯台レンズと回転機械

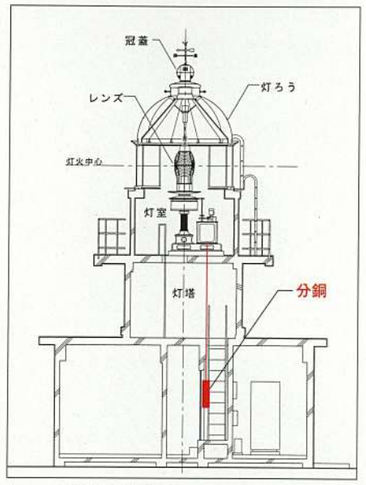


図1　灯台断面と分銅

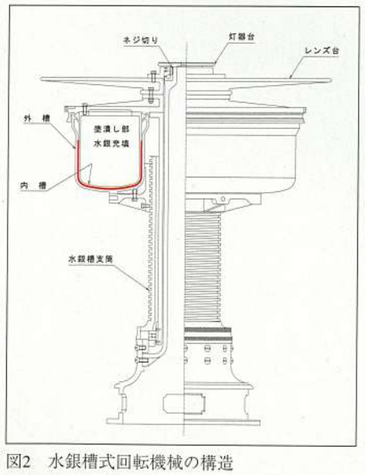


図2　水銀槽式回転機械の構造

神島灯台

聖ヨハネ教会堂
～構造から見える物語～

「森の小径」を登って行くと、周囲の自然と調和し、木々の色に溶け込むように建っている**聖ヨハネ教会堂**（1丁目6番地）（写真1）。到着したら、茶、白、緑を基調としたこの建物の外観を眺めてみてください。下層は煉瓦、上層は木材が使われ、屋根には軽い銅板が葺いてあります。実は、この構造から設計者の意図が見えてきます。

下層の煉瓦は一部を除いて全て解体時の材料を用い、「イギリス積み」という、段ごとに小口面と長平面とが交互に現れる積み方を取っています（写真2）。上層の木造部分は主に軸組に杉、他に松などが使われ、その上に白い漆喰が塗られています。また、創建から解体までは何度か改変が行われていますが、屋根は解体当時（一九六三年）、天然スレートが葺かれていました（写真3）。定礎石から出てきた設計図の青写真には、「屋根ルブロイド（※）二枚重ネ品葺立瓦棒一寸五分角二尺間被亜鉛鉄板包ミ」という記述があり、もともと屋根はラバロイトで葺かれていましたが、短期間で破損したため、後に天然スレートに変更されたことがわかります。また、上記の記述から、金属屋根である瓦棒を葺く予定であったということが判明し、移築の際は、保存上銅板葺きにして改めました（写真4）。

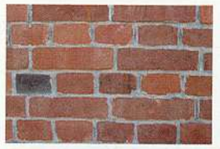


写真2　イギリス積みレンガ

写真3　天然スレート葺き屋根

写真1　聖ヨハネ教会堂全景

このように、上階になるにつれて軽くする構造、実は日本でよく起きる地震を意識して作られた、耐震構造として理解することができます。設計者はJ・M・ガーディナー（J. M. Gardiner 1857-1925）。スコットランド系米国人で、明治十三年（一八八〇）、米国聖公会より日本に派遣され、築地居留地内にあった立教学校（後の立教大学）の校長に就任しました。以来ガーディナーは日本で宣教師、教育家、建築家として過ごし、その生涯を東京で終えました。

地震がめったに起こらない米国東部で育ったガーディナーにとって、地震自体、来日二日目にして日本で初めて直面したものと言います。また、来日当初の地震の様子などに関する記述も残していることから、ガーディナーの地震に対する関心が伺えます。更に、彼の耐震構造への意識を強めるきっかけになった出来事として、明治二十七年（一八九四）、六月二十日の明治東京地震があげられます。地震の規模はマグニチュード七・〇、三〇余名が命を落としたという大規模なもので、その時の様子が、「風俗画報」という明治二十二年（一八八九）に刊行が始まった、当時の世相や風俗を描いた雑誌に残っています（写真5）。この地震により、ガーディナー自身が設計した立教大学も正面の塔が倒壊し、瓦礫の下敷きになった職員一人が死亡しました。その事実が、彼に多大な影響を与えたであろうことは想像に難くないでしょう。これは、ガーディナーがその後の立教大学再建にあたり、寄宿舎（明治二十八年）や尋常中学校校舎（明治二十九年）建設の際に見られるように、一階を煉瓦造、二階以上を木造とした、地震に配慮したと思われる煉瓦木造混合の構造法を取ったことからも伺えます。そしてまた、同じ構造法をとる聖ヨハネ教会堂も、この明治東京地震後の明治三十九年（一九〇六）に着手され、明治四十年（一九〇七）に京都に建てられたのです。

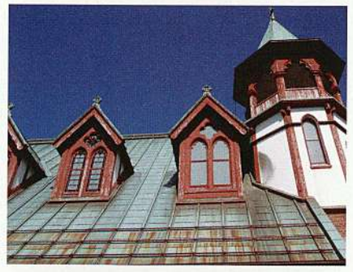


写真4　銅板葺き屋根

建物がどのようにできているか、その構造を知ることによって見えてくるものがあります。特に日本においては、地震と建物の関係は切っても切り離せない程深いものと思われます。構造は外観を見るだけでは分からないかもしれませんが、皆様も是非、建物の内外をじっくり見て、構造や材料などを手がかりに、建物が何を物語っているのか耳を傾けてみて下さい。

（注）ルブロイド＝「ラバロイドとも呼ばれ、『Ruberoid Roofing』は、厚紙を母体とする屋根材の商品名を指す。」（明治村建造物移築工事報告書第五集）

写真5　「風俗画報」挿絵（第七十四号 1894年）

やきものの国産暖炉

明治十年代初め、東京上目黒に建てられた**西郷従道邸**（1丁目8番地）は、駐日外交官との接触も多かった従道が、外国の賓客をもてなす迎賓館として建てた洋館です。この洋館は、フランス人建築家レスカスによる設計と考えられており、カーテンボックス、扉金具などはフランスから輸入されています。天井高は三メートルほどもあり、土足履きで、各室にはそれぞれデザイン・材料の異なった暖炉が設置されるなど、本格的な作りになっています。

洋館において、暖炉はその部屋の顔であり、日本でいう床の間にあたる重要なものとされています。各室の暖炉は、デザインを変えて設置される場合が多く、西郷邸もそれに倣っています。中でも異彩を放つのが、瀬戸の染付磁器で作られた二階応接室を飾る暖炉です（写真1）。他の洋館の暖炉をみると、一五～二〇センチ四方のタイルを組み合わせて装飾するのが一般的ですが、この応接室の暖炉は、幕板、両袖、天板という四個の大きな部材を成型・焼成し、組み立てる仕組みになっています。両袖には①松島、②安芸の宮島、幕板には③天橋立と、日本三景の山水画が、さらに一六・五センチ×一五〇センチの大きな天板には富士山と三保の松原が染付られ、暖炉いっぱいに日本の名勝が表現されています。この暖炉の製作者は、瀬戸で三代にわたって陶磁器生産を行った窯屋の二代目、加藤杢左衛門と推定されています。杢左衛門の窯は、職工三〇人を抱える大工場で、腕のよい職人・絵師が大勢働いており、大型製品を得意としていました。

明治初年の瀬戸には、その特徴的な鮮やかな青の染付の顔料となる呉須（ごす）（酸化コバルト）の使用方法や、石膏型による成型法など、多くの西洋技術が伝わり、新しいやきものを作り出すことが可能となっていました。また、明治六年（一八七三）のウィーン万国博覧会への参加を契機として陶磁器輸出に拍車がかかり、明治政府の「殖産興業・輸出振興」政策の下、輸出への積極的な活動を展開し始めた時期でもあります。その後、明治九年（一八七六）のフィラデルフィア万博、明治十一年（一八七八）の第三回パリ万博などに出品され、数多くの賞を受賞した瀬戸のやきものは、日本の草花、風景等を繊細にそして華麗に描きだすことから、世界的にも高い評価を受け、ヨーロッパのやきものに大きな影響を与えました。出品物には大円卓や、大花瓶等製作の難しいとされる大型のものが多く見られ、明治十五年（一八八二）の不況による衰退が始まるまで、様々なものが製作されました。

杢左衛門の窯でもフィラデルフィア、パリの両万博をはじめ、内国勧業博覧会に出品しており、数々の賞を受賞しています。パリ万博に出品したとされる、高さ二メートル以上もある大型の「染付花唐草文燈籠」や、大飾り壺、直径一メートルの大円卓などを製作し、海外へ輸出しました。

一方の西郷従道は、明治二年（一八六九）のヨーロッパ視察後、日本の兵制、警察制度の制定、殖産興業政策の推進に尽力していました。フィラデルフィア万博では、日本の事務局副総裁を務めており、この時に加藤杢左衛門ら瀬戸の陶磁器製造者たちとの交流が生まれたのではないかと考えられます。ウィーン万博を機に、日本独特の美を世界に発信し、同時に日本国内に対しても自国の陶磁器の価値を再認識させた瀬戸のやきものを、従道は認め、賓客を迎える応接室の「床の間」を飾ったのではないでしょうか。

現在、この暖炉は西郷従道邸の建物ガイドでのみ、ご覧いただくことが出来ます。ゆったりとソファに腰掛け、明治初めの政治家による日本の殖産興業への熱い思いを感じていただければ幸いです。

② 安芸の宮島

① 松島

③ 天橋立

写真2　暖炉詳細

写真1　西郷従道邸2階応接室